

---

# 夢のない

フーミンカーサン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夢のない

### 【Nコード】

N2348G

### 【作者名】

フーミンカーサン

### 【あらすじ】

童話の短編パロディ。ブラックジョーク気味。

## 夢のないヘンゼルとグレーテル

「昨夜未明、〇〇県〇〇市の一軒家で、その家の家主と見られる×さん六十六歳無職の

焼死体が発見されました。発見された現場には血縁関係のない兄弟とみられる二人の児童がおり、「おばあさんはお菓子をくれたけど、食べられるのが怖かった」などと話し、警察の保護を受けているとのこと。二人の児童に身寄りはなく、またそのような失踪届はでていないそうです。警察は事件と事故の両面で捜査しています」

## 夢のない白雪姫

蜥蜴の舌のように揺らめく蝋燭の火だけが照らす暗闇の中、黒いフードが蠢いた。面積の広い滑らかな布を、まるで寒さに凍えているように長い鼻だけを出して体に巻きつけている。

それは老婆だった。遙か昔、希代の美女と持て囃された彼女も、いまやその影もなく、日に怯えながら生きている。持ち合わせた才能と血の滲む努力で培った魔法も、時間の流れには抗うことができなかった。

だが彼女の、若さへの執念は消えないでいる。むしろ燃え盛ってさえいた。

割れた鍋。折れた杖。この地下室には時間回帰の失敗がそこら中に捨てられている。それらが山になったものなお、彼女は若さと美貌を諦めきれないでいた。そしていつしか、執心は嫉妬へと移り変わり、嫉妬は憎しみとして吐き出されることを望み、吐き出された憎悪は若い美女たちの命を奪うこととなった。

老婆は魔法の鏡の前に立ち止まった。そして呪文を紡ぐように、枯れた声で鏡へと問いかける。

「鏡よ鏡。世界で一番美しい女性はあるか？」

幾度と投げかけた粘調な言葉は、停滞した空気に気化して混じり合う。また一つ増える怨念に反応するかのごとく、鏡は面を波打たせて原色の絵の具を混ぜ合わせるように渦巻いた。そうして映し出された輪郭は、どうやら少女のようだった。だからといって躊躇はない。既に何人もの美女を手に掛けた彼女が、今更年齢に躊躇う理由はなかった。

次第にはつきりとしてゆく輪郭に、彼女は我が目を疑った。それは紛れもなく、昔、まだ魔法を満足に使えない頃の自分だった。

呆氣に取られている間に、鏡は幼い自分を映し続ける。映像は煤

を被りせき込んでいる姿であったり、肘や膝を擦りむいて泣いている姿であったりと様々だった。そしてそのどれもが、最後には笑った姿で終わっている。

それは魔法を追求し続ける昔の自分だった。幾度と失敗しても、挑戦することを止めない、今とは何もかもが違う自分だ。

老婆は縋るように鏡に泣いた。努力の先は何を見ようとしたのかも思い出せず、やせ細った指で鏡面を撫でながら崩れ落ちた。

## 夢のない白雪姫2

むかしむかし。白雪姫と名乗る壮健で可憐な女性が、森の小人の家に突然押し掛けて来ました。事前の了承を得ない不意打ちな来訪を小人たちは訝りましたが、そこは彼女持ち前の快活さとベビーフェイスで小人七人全員を押し切りました。いつの時代も若さとは強さなのです。

同居を快諾した小人たちでしたが、すぐに越え難い障害があったのです。何を隠そう、白雪姫は極度の不器用でありました。どの程度かと言いますと。洗濯をすれば衣服は川下まで流され、万が一生き残った数枚も、乾かすわと暖炉にかざしては灰にし、料理をすれば開拓を好む性格から独創性溢れた毒物が皿に山となって盛られ、掃除をするたびに小人の宝物がいつの間にかゴミ置き場に移動している程です。交際するのに必要なのは顔よりも内面だと、よくお顔の残念な殿方が声小さく叫ぶように、白雪姫の性格は凡庸な小人たちが永く同居するにはとても向かないものでした。

マシンガンが集中砲火されているような日々に小人は辟易し、遂には勘当しようと決意しました。しかし小人たちがどんなに白雪姫を追い出そうと心に決めてもそこは男、小鹿のような彼女を前にしてはどうしても意を伝えることが出来ません。どうにかして、やりわりと苦慮の意を表明しても、彼女の前向きすぎる思考回路が意味を曲解するので白雪姫の悪意のない悪行が止むことはありませんでした。

発散できないストレスで小人たちが禿げきった頃、黒いローブを全身にまとった魔女が訪ねてきました。杖とリングを積んだバスケットを両手に持った魔女は、妙に長い鼻を微かに揺らして小人たちに尋ねます。

「白雪姫はおらんかね？ ああ、怪しい者ではないよ。美味しいリングが手に入ったから、おすそわけにきたんだ」

こんな山奥にわざわざリンゴだけを届けに来た黒い老婆が怪しくないわけがありません。対応した小人は露骨に嫌な顔になりましたが、瞬時に頭を働かせました。飴細工のように艶やかなリンゴを白雪姫ピンポイントに渡したいということは、この老婆は悪い魔女で、リンゴは毒が入っているのだらう。そうでなければ様式美に反する。小人はすぐさまに白雪姫を呼び、室内から仲間の小人と一緒に耳をそばだてました。

「あらおばあ様。何か御用かしら？」

「これをお前さんに渡そうと思ってね。ぜひ食べとくれ」

「まあ美味しそう。でもこれ虫が食っているわ。穴ができているものの」

「虫も好かない農薬漬けではないということさ。大丈夫、虫は取り除いたよ」

「そうなの？ ではいただきます」

ばかりと白雪姫が倒れる音。魔女が立ち去るのを待って、小人たちは枯れた頭を隠す長帽子を宙に投げてハイタッチしました。なかには涙を流して抱き合い、試合に勝利したようにお互いを激励してさえいました。

とは言っても、結局は白雪姫を嫌いになれず悶えていた彼らが、すぐさま彼女を産業廃棄物のように人の目つかない山奥に捨てようなど、できるはずがありません。小人たちは白雪姫に似合う、高齢の感性にありがちな花のベッドみたいな棺を作り、彼女をそこで眠らせてあげることにしたのです。

七人が棺を囲み、いざ別れの時。小人たちはその小さな体を滑稽に揺らして泣きました。もちろんそれがどんな種類の感情から湧き出た涙なのかは判別しかねますが、とりあえず第三者が見かけたら、うら若き姫の死を悼んでいるような泣き方ではありました。

「これはこれは、なんと美しい姫だ」

その芝居がかった声音は意識した高さを持っていました。何事かと小人たちが見上げると、獣道もないただの斜面で、白馬に跨った

青年が蠟人形のような笑顔で白雪姫の美しい死化粧を凝視していました。

染めた金髪。ホワイトニングしすぎた歯。スタイルは良いのですが、体とのバランスが取れていない顔の局部。安っぽいオーラがかけ過ぎた香水と共にぷんぷんと臭う、何とも怪しげな青年でした。王子の理想と現実という対比写真があったとしても、現実ですら掲載されないでしょう。自信とは罪にもなり得る恐ろしいものなのです。

青年は大股を開き白馬から降りると、白雪姫の枕もとまで来てこう言います。

「なんと美しい。このような可愛らしい姫が亡くなるなんて、なんと胸が痛むことでしょうか。ああ、私は悲しい。……小人たちよ。彼女にキスをしてもしも良いだろうか。私も弔いたいのだ」

良いわけありません。突然現れ、それらしい前置きをとりあえず並べて美女の亡骸に接吻をしたがるなど、変態以外の何物でもないのです。

小人たちが、驚いて変態をまじまじと眺めている間に、変態はタコのような唇を白雪姫のルージュに合わせてしまいました。それどころか、生意気にも舌を動かしているらしく、粘液の擦れる気持ちの悪い音が響いてきたのです。

ネクロフィリアな救いようのないド変態に小人たちが殺意を抱いた瞬間。ド変態は宙を飛んでいました。

「変態!!」

呆氣にとられる小人たちの中心。細い眉を傾けた白雪姫が立ち上がって叫びました。

まさか王子もどきのおかげだろうか。そう思い倒れた王子もどきを見ますが、頬に手の跡を赤くつけた王子もどきはぴくりとも動きません。まるで死体のようです。

「眠っている間に乙女の唇を奪うなんて、それが殿方のすることでしょうか!？」 貴方のような乱暴な男性がいるから、女性は世情の



権力を乱用した横暴な振る舞いに怯え続けなければならないのです！ 私はこの間にもお淑やかに影で生きようと努めているのに……もう知りません！ 私はずっと森に住み続けます！」

堂々と、そしてさりげなく小人たちとの一生の同棲を宣言し、白雪姫はぷりぷりと怒りながら小人の家に駆け込んで行きました。

展開についていけない小人たちは王子もどきをとっぴりあえず眺めることにしました。すると口元がもぞもぞと動くではありませんか。注視を続けるとしばらくして、細い線の胴体に丸い目を二つ付け足した、イラストのような虫がひょっこりとでてきました。虫が王子もどきから脱出し雑草へとダイブすると、王子もどきは息を吹き返したのです。

「なんだか頬が痛むのだが……はっ、姫、姫は！？」

どうやらあの虫が白雪姫と王子もどきを眠らせた原因のようでした。きつと魔女がリングに仕込んだのでしょうか。王子もどきが虫の存在を知らぬ素振りから推理するに、結局王子もどきは死体から唇を奪う変態だったのです。

ヒロインを捜す主役を演じている変態の横で、小人たちはため息を吐きました。少しの間だけ手に入れた平穏はどうにも崩れ、喧騒な日常がこの先ずっと続くのです。

「これも、悪くないんじゃないかなあ」

白雪姫が死ななかつたのだから。小人の誰かが呟きましたが頷く者は一人もいませんでした。しかし否定する者もいなかったのです。小人たちはお互いを見合って力なく笑いました。自虐か、それとも喜びか。それは小人たちでなければわからない、小さな、でも何かを確信したような笑みでした。

そして小人の一人が落ちた虫をさっと手にしたかと思うと、それを狂ったように踊る変態の口に力いっぱい突っ込みました、とさ。おしまい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2348g/>

---

夢のない

2010年10月11日23時05分発行